伊勢音頭戀寢刻

二七

油屋の段

〔解題〕 お紺貢の油屋の騒動の實說として關根只誠翁の情死錄に載せてある要領は次のやうである。志州鳥羽の藩醫佐藤某の二男享次郎幼年の頃伊勢の御師孫福九太夫の養子となつて名を齋と改め、寛政四年頃京都へ出て醫術を修業し、同七年秋歸つて開業しようとした折柄友達に誘はれて古市油屋の茶汲女おこんといふに馴染み、のちしば〳〵通ひ、末は夫婦と契つた。此の時大阪の商人で井澤文三郎といふものが參宮の折柄古市で遊びおこんの容色をめでて身請しようとした。これを聞き知つた齋は憤怒して油屋の亭主清右衛門の母並に下女を殺害し、おこんその他六人に手を負はせて庭口から逃走した。これは寛政八年五月四日の夜の事であつた。そして齋は六日の朝自宅に歸つて自害した、時に廿五歳であつたといふ。

この事件を大阪の角座では近松德叟が脚色して同年八月五日から「伊勢音頭戀寢劍」と題して福岡貢に中山文七、おこんに芳澤いろは、喜助嵐雛助等の役割で演じて大當りであつた。尤もこれより前七月に京四條南側の早雲座で「みやげ川崎踊拍子」と題して興行したが、やはり「伊勢音頭」の方が好評で、のち度々繰返されて今日に及んで居る。

人形芝居の方では天保九年七月廿五日から稻荷の文樂座で「一谷嫩軍記」の切として「伊勢音頭戀寢劍」と題

して上演したのが始めで、松原の段、十内住家の段、福岡屋敷の段、二見浦の段、古市油屋の段から成り、その油屋の切は竹本大隅太夫が語つて居る。

地跡にお紺はうつとりと。暫し思案に暮れ告ぐる。唄遠寺の鐘も身にナホス泌み涙にくれ居たる。詞モ此中からもくれ〳〵と。頼ましやんした折紙の詮議。アノ奥の客が慥に持つてゐるとは思へども。帯紐解かねば肌身は許さず。アマどうせうぞ。オヽそれよ。此身を任すも夫の爲。折紙を取返し潔う白害して。未來の契りを。地待つが樂しみ。長地カヽリせめては死後の言譯と泣くみて。フシカヽリ心。ときつく胸の闇。地やゝあつて顔を上げ。折角思ひ思はれて。二世と交した貢さん。退かねばならぬ浮世の義理。詞昨日伯母御様のお詞には。許嫁の榊様と。祝言をさゝねば。養子親へ義理が立たぬ故。思ひ切つてくれいと。モ事を分けてのお頼み。〳〵砌冷泉カヽリ引寄せて。書置く鹿の巻軍も。今宵限りの命毛と。スエフシ又仇夢も。別れは惜しき。明けの鐘。炎の中に暮らさうがあなたを退いて片時も。浮世の日影が見られうか。むごいつれない胴慾な。別れといふ字を聞いてさへ。胸にしみ〴〵悲しいとフシ恨は聲高に。詞お紺さん〳〵。オヽお紺一遍と尋ねましたわいな。イヤコレシコレお紺さんえ。モ今更いふぢやないが。此間からも勸めてゐるアノ岩次様。大抵よいお客ぢやないぞえ。それにお前も物好きな。いかに心中立てるとて。アノ淳禰宜の貢づら。オホヽヽヽ。お紺さん堪忍しておくなはいや。ホヽヽヽ。モ今も今とてお鹿さんが。貢様から度々の無心狀。誠かと思うて身の皮剝いで打込んだが。モウ悔しいと私への懺悔。コレシコレ。此文を見やしやんせ。アノ口先でちよぼくさと。古市中の女郎の油をねずり廻る油虫。モヽその油虫の事はとんと思ひ切り。さんそこにかいな。そんな事知らずに。

岩次様に摩かんすりやお前も出世。コレシコレお紺さんえ。この萬野は悪い事は勸めませぬぞえ。モウ〳〵ふつつりと思ひ切らしやんせと。地焚付けかける詞の藁。それとは知れど眞顏に受け。詞オヽ成程この狀の樣子では。興の覺めた貢樣。そんならお前の言はしやんす通り。岩次樣に乘替へうわいな。エヽアノお紺さん。そんならお前樣ほんまに岩樣に乘替へる氣かえ。何の嘘をいふものかいな。お紺さん。オヽ好きやよやよ〳〵〳〵。ホヽヽヽ。コリヤコレ近年の大出來ぢやわいな。お紺さん。オヽよさやよやよ〳〵。ホホヽヽ。そんなら直ぐに奥へ往て。改めて堅めの盃。地サア〳〵お出でと無理やりに。引つ立てられて詮方も涙。フシ隱して入りにけり。地斯くとは知らず。唄うと〳〵と。ナホスフシ戀には心惹かれくる。身の災難に福岡貢。スエ兎や角案じ煩みける。詞ムヽウアノ唄は油屋の二階座敷。阿波の客が居續け騷ぎ。テモマ面白さうに唄ひをるなア。ガそれに引替へ心ならぬは萬次郎樣のお身の上。今宵につゞまる御身の難儀。お紺に頼んだ折紙の詮議。今に何の返事のないは。岩次の手にないのか。マア何にもせよお紺にちよつと逢ひたいと。地見廻す内より出で來る喜助。出會ひ頭に。詞ヤア若旦那樣。オオ喜助かヤ幸ひ〳〵。どうぞ首尾してお紺に一寸逢はしてたも。ヘイ畏りました。地奥口見廻し。詞イヤ申し若旦那樣。憚りながら一寸あれへ。喜助イヤ申し若旦那樣。餘りせき〳〵お出でなされます所ぢやござりませぬぞえ。何を猪小才なと思召しませうが。モ斯樣に慮外を申しまするも。つゞまる所はあなたのお爲。ホンニ私は夜の福岡へ御養子。それ故親どもも奉公引いてこの古市にて僅な暮し。その後大病を煩ひ。今際の枕元へ私を呼び。アノ福岡孫太夫樣の御養子貢樣は。我々親子が古主の若旦那樣。隨分ともに心を付けて忠義をつくせと遺言でござります。それで私も。どうぞ御恩が送りたいと存じますれども。モ高が料理人風情の私。其大切なあなた樣が。毎日毎夜の遊所通ひ。お紺さんとの浮名は古市中一杯。福岡樣には許嫁の奥樣もあり。御養子の御身分で。あゝいふお身持ではお爲にならぬ。いつぞは御意見申したいと思ふ折から此お出會ひ。イヤ申し若旦那樣。餘りせき〳〵お出でなされます所ぢやござりませぬぞえ。何を猪小才なと思召しませうが。モ斯樣に慮外を申しまするも。つゞまる所はあなたのお爲。ホンニ私は夜の

目も合はず。案じてばつかり居ります
るわい。ハ、、、、。ヤ是はしたり。
何事も御存じのあなた樣。必ずお氣に
さへられてヘイ下さりますな。ム、
スリヤそちは喜兵衞が悴であつたよ
な。ヤコレハシタリ。モさすれば我が
爲にも家來同然。古主を忘れぬそちが
意見。惡うは受けぬ忝い。ガマアそれ
は格別。コリヤコレ大切な一腰。わし
が持つて居ては人目に立つ。歸る迄預
つてたも。ヘイ私がしつかりとお預り
申しました。アヽコレその一腰は青井
下坂。エヽそんなら是が。いかにも刀
は手に入れども。是に付いたる折紙を
騙られ。モ色々と詮議をすれども。今
に於て行方知れず。何卒折紙を取返さ
んと。毎夜爰へ入込むも。若しや詮議
の手がかりもあらうかと心を碎く某。
コレ必ず他言は無用ぢやぞや。ヤ是は
是は左樣とも存ぜず。慮外の段はまつ
ぴら御用捨。シテ其折紙を騙つた奴が
この油屋の內に。サ慥にそれとは知ら
ねども。客やと思ふはアノ奧の。コレ
喜助一寸耳を貸しや。エイ。そんなら
アノ岩次が。コレシイ。密かに〳〵。
何かは奧の大騷ぎに。首尾を作るは最
究竟。そんなら喜助。若旦那樣。サア
〳〵こちへと 地 先に立つ。案內につれ
て福岡貢。ツシ 暖簾の內へ入りにけり。
地 こなたの障子引きあけて。窺ひ出で
たる德島岩次。何か心に打點頭き。差
足拔足暖簾の內。忍び入つて二腰の刀
をそつと跡先見廻し。おのが刀と貢が
刀。手早やに目釘コツチ〳〵。身を擦
替へる卽座の惡智慧。暖簾の陰より窺
ふ喜助。それと白刃の二腰を。元の如
くに差し納め。又も納戶へ ツシ 持つて
入る。地 お紺は過す無理酒の醉ひに心
も亂れ足。詞 岩次樣〳〵〳〵と。地 呼
立てられて出て來る岩次。詞 オヽ岩樣
とした事が。座敷をはづしてお前はど
こへ。アヽイヤ一寸手水に。アノマア
嘘ばつかり。エヽ何の嘘を言うてよい
ものか。證據人は北六萬野。ソレ用意
よくば早や是へと。地 いふ內奧に聳高
砂。謠 相に相生の松こそ目出たかりけ
れ。ナホス 地 北六萬野がとり〴〵に。道具屋
渡壽盃硯蓋。めい〳〵に携へて。詞 サ
ア〳〵申しお紺さん。岩次樣の堅めの
盃。地 色直しは直ぐに床入り。詞 サア
〳〵媒介役はこの北六。嫁君から飲ん
で差し給へと。地 無理に突付け注ぎか
くれば。怯へ兼ねて駈出る貢。お紺が盃
ひつたくり。ツシ 落花微塵と投付けた
り。詞 ヤイお紺。おのりや此盃しては
濟むまいぞよ。オヽ誰かと思へば貢樣。
お客と盃するがどうして濟まぬえ。イ

ヤサ一通りの盃なら格別。この盃ばかりは差す事はならぬわい。コリヤお紺。おのりや是迄いひ交した事皆忘れたな。モ最前から見て居ればほてくろしい座敷ぶり。エ、もう了簡がと 地立ちかゝるを岩次は引退け。詞ヤイ〳〵滓宜の大馬鹿者め。身が揚詰めの女郎に指でもさゝば。腹も脛もぶち折るぞよと。地いふに萬野がしや〳〵り出で。詞コレイナア是し貢様。お前はマアこちの内へ。誰が許してござんしたえ。お前の様な油虫はな。顔見るのも胸が悪い。アイぎえんが悪い。サア〳〵とつとゝ去んで貰ひましよと。地ずつかり言はれて猶せき立ち。詞コリヤ萬野。マ味な事いふな。この貢が女郎の油をいつ吸うた事がある。サア〳〵それ聞かう。アノマアしら〴〵しい顔わいな。ヤ是しコレお紺様。最前の文見せてやからんせと。地いふにお紺が懐より。取出し渡す以前の文。一々貢が見て恟り。詞ヨウコリヤおれが名を騙つて。女郎のお鹿へ無心の狀。何と覺えがあらうがな。イヤ知らぬ。元より譯ある中ぢやなし。こんな文やつた覺えない。あた汚いアノお鹿。風俗といひ面といひ。しつかい猿芝居のお染。あんまり呆れて物が言はれぬと。地悪口聞いて駈出るお鹿。貢が前に豪臼なり。詞コレシ貢様。最前から聞いて居ればあんまりぢやぞえ〳〵。アイ。私やどうでお紺様の様に。美しうはないけれど。顔でお客は取らぬぞえ。コレ肝心の時には。くつたりお客に堪能さすに依つて。終に一日お茶引いた事はござんせぬ。お前もそれを見込みに。アノ萬野様を頼んで附文。その度々にコヽコレ見なされ。此通りにナア。二歩ちよつとお貸し。ソレ又この狀に三歩貸し。まだ爰にあるソレ見なされ。また一兩入るのと。モ親にも聞けぬ無心をば。五度十度の 唄事かいな。エイ何をそれに今更知らぬとは。ソリヤ卑怯ぢやわいな〳〵。筆先でたらし込み。身の皮剝いだ生盗人。エ、腹の立つ〳〵と。地いひつゝ兩手に胸づくし。引つ掴む手をもぎ放し。詞エ、様々の戯言。身不肖なれども福岡貢。そちらに無心いふ様なおれぢやないわい。コリヤお紺。是には何ぞ譯があらう。譯をいへどうぢや。どうぢやい。オヽお前の内證の文が私の手に入り。腹の立つはコリヤ尤でござんす。ガ申し貢様。お前と私が中は人も知つたサ中ぢやぞえ。金の入る事があるならば。打明けて斯う〳〵と言うて下さんしたら。何ぼ甲斐性のない私でも。三十兩や五十兩の金。ま

んざら否とも言ふまいに。僅か二歩や三歩の端金。お鹿様に無心いふとは。モみす〳〵知れたイヤサ。見下げ果てた心ぢやな。モウ〳〵〳〵色も戀もさめ果てたわいな。サそれぢやに依つてふつつりと。お前の事を思ひ切り。岩次様に靡くのでござんす。アイさう思うて地下さんせと。けんもほろゝに言放す。詞コリヤやいお紺。おのりや氣が違うたなおのりや。モ流れの身にも誠ある者と思ひ。取交はした起請誓紙。まだ其上に大切な。イヤサ。大事の事まで請合ひながら。わりやそれぢや。エ、イあたどんな違ひました。イヤサ氣が違ひました。アイ性根が腐りましたわいな。モまい〳〵〳〵卷い付かずと。早う去んで下さんせと。地口には言へど心には。オ、道理でござんす。オ、道理ぢやと。言ふに言はれぬ此場の時宜。血を吐く思ひ フシカヽリ押隱す。知らぬ貢は腹立ち涙。傍に北六高笑ひ。詞ハヽ、、、コリヤをかしいわい。客が女郎の物騙して取るとはコイツハ新しいわい。コリヤ新版ぢやわいハヽ、ハヽ。これがほんの伊勢乞食ぢや。〳〵と。地何がな當る憎て口。岩次も片頬にせゝら笑ひ。詞アヽイヤモ聞けば聞く程馬鹿な穿鑿だわい。お紺が心底聞く上は。今夜中に身請けして身が女房。ドレ金の威光を見せうわいと。地お紺が膝を假枕。腔ふんぞらす。フシ傍若無人。地見るに貢は齒ぎしみ齒切り。詞エ、見違うたあの爰などう畜生。その根性とは知らず。大事を明かしたがエ、無念なわい。アとは言へおのれに限つて。よもや其様な根性とは知らなんだ〳〵わいと。地睨む眼にはら〳〵

伊勢參

涙。お紺が胸は猶百倍。張裂くばかりのせぐるしさ。涙まぎらす煙草さへ。フシカ、リ炎にむせる思ひなり。地納戸に始終立聞く喜助。刀を持つて走り出で。調貢様。モウお歸りなされませ。悪い事は申しませぬ。サお預り申したお腰の物と。地差出す刀引つたくり。腰に差す間も氣はしゆらくら。フシ刀の違ひに目も付かず。地萬野は傍へ立寄つて。調コレシ貢様。お前はもうしやべり仕舞ひかえ。オ、氣の毒やの。ヤコレシ貢様。一寸こちらへお出でなんせ。サア〳〵早うどんせ。エ、早うおいなんせ。ヤナニ貢様。最前から段段の失禮。サアお腹が立たう尤もでございます。ガ私に免じてどうぞ堪忍して上げておくれなさんせ。ヤコレシ貢さん。何ぼお前がやき〳〵思はんしても。錢の切目が縁の切目ぢやわいな。アノ

音頭

お紺様を恨みなさるゝ事は微塵もないぞえ。お前のその素寒貧を恨まんせ。ヤ、コレ、お前の様な貧乏神。片時置くのも内の不吉。サアとつとゝお歸り〳〵。ようお出でなさつたえ。エ何煙草入を忘れたのかえ。ドレ〳〵〳〵取つて來て上げませう。サア〳〵お歸り〳〵〳〵。エ、去にやがれと突出す門口。地こちらへ兼ねて刀の柄。手はかけながら忠孝の。二字に引かれて喰ひしばる。調チエ、うぬ。何ぢやえ。幽をむき出し。草葉子をひねくつて。何かえ。私を斬る氣かえ。面白い〳〵。サア〳〵斬られよう。サどこから斬りなんす。コリヤ萬野おのれはな。サアお斬りなんせ。エ、勝手にさらせと。地道を蹴立てゝ。フシ立歸る。地萬野は跡を見送つて。調サア〳〵油虫の幕が切れた。サ

ア岩次様北六様。是からは色直し。お床入りの玉子酒。お紺様も一緒に。サア〳〵二階へ〳〵と。地言ふもそれ者の フシ高調子。詞イエ〳〵私やまだ岩様に帶紐は得解かぬわいな。ムヽスリヤなぜ〳〵。サイナア。お前の持つて居やしやんす袱紗包。定めて色の起請か文。それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな。ナニ是か。アイ。コリヤ大切なアイヤ。大切な〳〵金比羅様の御守。サ金比羅様の御守にもせよ。私に見せて下さんせにや。眞實心が解かぬわいな。テモ扨も女郎といふ者は疑ひ深い者。ハヽヽヽ。アヽ是非に及ばぬ。大切な品なれども。そちにしつかり預けるぞ。アイ。地あい〳〵合點も一寸遣れ。嬉しさ怖さ胴震ひ。足を踏みしめ段梯子。二階へこそは フシ上り行く。地岩次は跡に聲ひそめ。詞コリヤ萬野。身が刀をはや是へと。地いふに心得暖簾の内。刀抱へて フシ走り出で。地渡すを取つて打眺め。詞ヨウ〳〵。コリヤ是身が刀ではない。エヽそんなら貢が取違へて去んだに違ひはないと。地いふに北六勇み出で。詞何ぢや貢が刀を取違へて去んだとは天の興へ。是こそ望む青井下坂。アヽイヤ〳〵それが大間違ひだわい。最前密かに貢が刀と身が刀。中子を摺替へ置いたに。取違へて去に居つたがほんの下坂。エヽ鈍な。私がちよつと一走り。アヽイヤ〳〵申し。そのお使は私が參りませうと。地いひつゝ納戸を出る喜助。詞オヽ喜助かよく氣が付いた。貢に追付き腰の物を替へて來い。サ早う〳〵と手に渡せば。地ヤまつかせ合點と。 フシ駈り行く。地萬野は俄に心附き。詞コレ〳〵申し岩次様。お前はマア滅相なお方ぢやわいな。アノ喜助はなア。慥か貢が籠の内。刀抱へて フシ走り出で。地渡すを取つて打眺め。詞ヨウ〳〵。コリヤ是身が刀ではない。エヽそんなら貢が取違へて去んだに違ひはないと。地いふに北六勇み出で。詞何ぢや貢が刀を取違へて去んだとは天の興へ。是こそ望む青井下坂。アヽイヤ〳〵それが大間違ひだわい。最前密かに貢が刀と身が刀。中子を摺替へ置いたに。取違へて去に居つたがほんの下坂。エヽ鈍な。私がちよつと一走り。アヽイヤ〳〵申し。そのお使は私が參りませうと。地いひつゝ納戸を出る喜助。詞オヽ喜助かよく氣が付いた。貢に追付き腰の物を替へて來い。サ早う〳〵と手に渡せば。地ヤまつかせ合點と。 フシ駈り行く。地萬野は俄に心附き。詞コレ〳〵申し岩次様。お前はマア滅相なお方ぢやわいな。アノ喜助はなア。慥か貢が籠の内。刀抱へて フシ走り出で。地渡すを取つて打眺め。詞ヨウ〳〵。コリヤ譜代の家來ぢやといなと。地聞くより岩次は興覺め顏。地サア〳〵壺ぢや〳〵。岩次様壺とは何壺ぢやえ。水壺かえ鹽壺かえ。エヽ子壺ぢや〳〵。コリヤコリヤ萬野周章てな〳〵。と言うて身どももあわてゝ居るわい。コリヤ〳〵萬野。そちは喜助に追付きて刀を取り。貢が刀と替へて來い。ハイ〳〵心得ました。貢に逢うて刀をたくり。きつとお渡し申しませう。ドリヤ。地一走りと身繕ひ裾引上げて。詞オヽイ〳〵喜助殿。〳〵と地聲は先。體は跡に心も空足を早めて フシ走り行く。地岩次は跡を見送つて。詞萬野が戻つて來る迄は。皆を相手に二階で飲まう。地サア〳〵こちへと引連れて フシ二階へこそは行く跡へ。地フシカヽリまた引返す福岡貢。取違へたる脇差の身は正眞の下坂とも

オクリ知らず。知らねば氣もそゞろ。門の戸引明け内に入り。詞ゴリヤ喜助々々。萬野は居ぬか。エヽ居らぬか。地と見廻す折しも。遣手の萬野。フシ息もすた〳〵立戻り。地顔見合はせて。詞ヤア貢様。お前もいかに周章てるてゝ。腰の物を取違へるといふ様な。麁相な事があるものかいな。その刀こつちへと。地取りにかゝるを突放し。詞イヤ身が刀から先へ渡せ。エヽマア渡さぬとて取らずに置かうか。エヽこの刀と。地カリ取りにかゝるを續けさま。打てばつしり鞘割れて。思はず知らず一刀。詞アヽちめた。オヽウ貢様お前斬りなはつたなア。アレイ〳〵と地泣叫ぶ。聲立てさせじと口に手を當て。見れば血汐に身はくれなゐ。詞ヨウヤヽヽヽヽ。南無三手が廻つたか。地モウ百年目と又ずつかり。斬られながらに逃行くを。髻掴んで引戻し。肋骨をぐつと一刺り。フシその儘息は絶果てたり。地折しも奥より北六岩次。跡に續いて出て來るお鹿。詞岩次さん北六さん。〳〵と。地尋ね向うに立寒がる。詞ヤア貢さん。アレ人殺しぢや。〳〵。アレ〳〵と地いふ聲に。コリヤさせぬわと北六岩次。留めにかゝるを身をかはし。左へ廻る北六を。肩先さがりに斬付くれば。こりや叶はぬと氣轉の岩次。フシカ地カリ奥庭さして遁れ行く。タヽキお鹿は足も地につかずこけつ。轉びつ這廻る。地おのれお鹿といふ聲に。思はず知らず立上り。逃行く後を遁さじと。踊りつたなア。フシ幹竹割り。地拍子物音聞きつけ勝手より。起き番男仲居下女。物騒がしきは何事と。差出す仲居が手燭の光。振向く拍手貢が顔。見るより三人足わな〳〵。詞ヤレ人殺し。〳〵。〳〵。地といふ間も待たず左より。右の腕を斬落すうんと仲居が卽死の有様。見る兩人がうろたへ。廻り。奥と表へ逃行く男。外へ出でなば面倒と。聲をもかけず後袈裟。返す刀に下女が首。水も溜らず斬り。落す。地音も分らぬ寢とぼけの。小女郎が出る足元に。血に辷つて。ばつたりと。倒ける拍子にお鹿が傍。詞オヽ此様な所に水を流してオヽ冷めた。オヽ爰に寢てぢやは誰ぢやいなア。コレ起きんかいな〳〵と。地言ひつゝ立寄り見て悔り。詞アレお鹿さんが斬られてぢや。アレ〳〵といふ間もなく片足。地丁ど斬放せば。片足立ちに。一一一。三よろ〳〵〳〵と。鉢前の手洗鉢に取付いてフシその儘。息は絶果てし。フシ無慚といふも餘りあり。地サア此上は岩次一人。取逃しては。刀の有所。詞この一間ナホスこそ。ムそれと

地窺ふオクリカ、リ内より泊り客。詞アヽ一杯機嫌にぐつたりと寝てのけた。醉覺の水の心地や朝櫻かハヽヽヽ。オコリヤ灯が消えてあるわい。地と言ひつゝ出づる廊下口。窺ふ貢が刄の光。コリヤたまらぬと逃行く庭先逃ぐる人影岩次と心得。フシ追うて行く。地投節寝間より出づる。相方女郎。唄貢を客と心得て。詞申し此人さんわいな。どこへ往きなんす。申しそちらは前栽ざますよ。落ちなんすなえ。危ないさますよ。水さいますか。コレシ水はこちらにあるわいな。と唄扱も脇へ。しどもなき。裾もほら〳〵。追ひ行く女郎。ナホス振返つて拜み打ち。客はふ〳〵樹木の蔭に。息を詰めてぞ屈み居る。コハ心得ずと燈籠の陰にすかして。慥に岩次どさんなれと、襟髪掴み引出し。フシ土に差付けにじり付け。詞サア下坂の刀はいづくへやりしぞ。眞直ぐに白狀ひろげと。地拉ぎ付けられ。詞アア申し私は何にも知りませぬ。ヤア今になつて知らぬとは卑怯至極。言はぬとて言はさいで置かうかと。地いふ内に來る人音に南無三と。ためらふ際に刎返し。逃行く後を横なぐり。直ぐに立寄り顔見れば。詞ヤアコリヤ岩次ではなしチエヽ。地取逃せしか殘念とスエ拳を。握り居たりける。地お紺は驚き心も空。こけつ轉びつ走り寄り。詞貢さん。ヤアお紺か。地覺悟致せと突きかける。詞マア〳〵待つて下さんせいなア。サア〳〵腹の立つは尤もなれど。是には段々譯のある事。ヤア何の譯の事と。地又振上ぐる刀の下コレイナア。詞マア氣を鎭めてとつくりと。これ見て疑ひ晴らしてと。地投出す包手に取上げ。詞ヤアコリヤコレ折紙。ムヽそんなら宵のつれなきは。サイナアお前に忠義が立てさせたさ。どうやら斯うやら岩次を騙し。首尾よう手に入るこの折紙と。地いふに貢はハヽアア今更にスエカ、リ後悔。涙のフシカ、リ折からに。地喜助は心ならざれば。若しやと思ひ立戻る。詞喜助か。ブウ若且那。シテこの有様は。どうも堪忍ならぬ故。喜助赦してくれいと。地刀の柄に手をかくれば。その手を押さへて。詞コリヤ狼狽へて何となされます。オオ狼狽へた。最前そちに預けた刀。サそれはそこに持つてござるのが誠の下坂。ヨウそんなら是が。エヽ有難や〳〵な。サア申し二色ともに揃ふ上は。一時も早う萬次郎様へ。早や〳〵お渡しなされませ。喜助お紺。段々の心遣ひ何にもいはぬ。チエヽ忝い。シテ此場の首尾は。ヘイ私が呑込みました。跡

構はずと萬次郎様へ。ム、然らば喜助。地跡を賴むと言捨てゝ。フシ立出でんとする所へ。地小陰をぬつと德島岩次ヤアどこへ〳〵。詞大事の刀こつちへ渡せと。打つてかゝれば身をかはし。シヤよい所へ德島岩次。おのれを方々尋ねしに。爰へ出たは百年目と。地打つてかゝれば切拂ひ切結び。隙を見合ひ一刀。うんと倒るを乘つかゝり。恨みの刀受取れと。刺通されて七轉八倒。フシ心地よくこそ見えにけり。地傍にお紺は心せき。夏の夜なれば早や明方。少しも早う其刀をオ、言ふにや及ぶ。詞忠義を立つるも二人の情と。地心も勇む足勇む。忠義に心勇み立ち屋敷を。さして急ぎ行く